

牛乳と金貨—「銀河鉄道の夜」初期形を読む

山本昭彦

1. 物語の構成
2. ブルカニロ博士
3. 金貨
4. 「ケンタウル祭」から「ケンタウル祭の夜」へ
5. 失われた丘の上のジョバンニの視線
6. 黒い結
7. 結論

総合科目「東西文化の諸相」の1993年度のテーマは「テキストの力」であった。テキストが読者に及ぼす力と言え、文学作品の魅力そのものと言うことも出来るだろうが、テキストをつむぐ詩人、作品を書く人もまた、そのテキストの最初の読者である。ここではテキストが作家自身に働き掛け、作家がさらにテキストを変貌させて行く場合を宮沢賢治を例にみてみたい。

賢治童話の大部分は生前には刊行されなかった。常に手元におかれ、絶え間無く改訂された。ある一つの物語が詩、物語、芝居と様々な形をとって表現されたり、ある物語が他の物語に組み込まれたり変容したりということもしばしばだった。これらの詳細は、厳密で見事な校訂によって画期的な校本全集があますところなく示しており、これを土台に新たな全集が編まれている。

賢治の生前未刊の「銀河鉄道の夜」は、晩年の病床においても常に手を加えられ続け、登場人物のみならず物語の骨格まで変わって行った。このように生成し続けるテキストの発展過程を正確に辿ることは難しいが、校本全集の成果によって初期形第一次稿から現行形としての第四次稿まで、大きく分けて四つの段階が認められる。第四次稿が「最終稿」であり、現在全集等で読まれる形ではあるが、だからと言って必ずしもこれが「決定稿」と言えるわけでもない。賢治がさらに長生きすれば、別のかたちが産み出されたとも考えられる。賢治にとって「決定」や「完成」はあまり意味を持たなかった。この点についてもかねてより指摘されているし、ここでは「永遠の未完成、これ完成なり」という「農民芸術概論綱要」の結論部分を思い出しておくにとどめよう。¹

これまでにも、校本全集編集者たちによる討議は一冊の本となり、安藤元雄はジョバンニの性格の変化、詩人への道程を跡付け、村瀬学も物語の意味づけを丹念に辿っている。既に多くの研究があるにもかかわらずここに「初期形第三次稿」（「三次稿」）と「四次稿」（「現行形」）を較べてみようとするのは、テキストの力としてあまりに見事な実例

と思えるからである。そして必要最低限の改訂・加筆が思いもよらないほど統一的な効果を上げている様が、未完ではあっても見事に構成されたテキストというものへの思いを誘ってくれるからでもある。部分的な改訂・加筆・削除も出来るだけ丹念に元の文脈に戻してみても、全体に及ぼす効果を考え、作品を解釈(エクスカリバー)し直してみたい。²

1. 物語の構成

この物語を現行形の第四次稿で読むと、大きく三つの部分に分けることが出来る。第一は、ジョバンニの学校生活や家庭環境、交遊関係が語られる部分で第1、2、3章にあたる。第二は友達から仲間外れにされ一人町外れの丘に上り、いつの間にか銀河の列車の旅に出ている部分で第4章から第9章までを含むことになる。第三はこの旅でふと気付くとカムパネルラが消えていて、ジョバンニは丘の上に目覚め、現実においてカムパネルラの死を知る部分で、第9章の後半にあたる。とは言え、銀河の列車の旅が始まるのは第6章からであり、第4、5章は地上の生活と銀河の列車の旅との転換を生み出す部分であって、境界をなすもう一つの部分とみることも出来る。また、今、一応、章と呼んでみたが、実際には章とは書かれておらず、また三次稿では通し番号もふられず場面の区切りとしてあっただけであるし、例えば第9章にあたる「ジョバンニの切符」の章ばかりが長く、しかもこの標題も第9章の中身すべてを尽くしてはいないなど、こうした章分けにも未完成な部分はある。それを承知の上で便宜上三つに分け、ひとまず物語を辿ってみよう。

現行形では、7月の或る午後の教室に始まる。ジョバンニは先生から銀河とは何かと尋ねられる。かつてカムパネルラと共に調べたことがあり、知っているはずなのに答えられない。このもどかしさが見事に表現され、同時に仕事の疲れからくる眠さ、そこから家庭環境までが無理なく説明される。先生の説明は科学的であるし、この先の夢の世界の無限感への十分な準備にもなっている。カムパネルラもまた銀河が何で出来ているか答えられないが、ジョバンニはカムパネルラの友情を思い、自分に同情して答えないのではないかと考える。

現行形の第二の部分は、「(ぼくは立派な機関車だ。[...])」とジョバンニが自分を機関車に見立てて坂を駆け降りて行く場面に始まる。街灯の影の効果が印象的に使われる。擦れ違う級友ザネリから、父がいないことで悪態をつかれジョバンニは落胆する。母は病気で栄養が必要なのに牛乳が届かない。それを受け取りに町外れの牛乳屋まで赴くが、応対に出た人もその場では渡してはくれず、後で来るようにと言う。この日はこの無国籍な町の「銀河の祭り」の日で、ショウウィンドウは飾られ、学校仲間も楽しそうに祭りの準備を話し合っているのに、ジョバンニだけは相手にされない。偶然行き合った級友からも馬鹿にされ思わず走り去り、「黒い丘」へと向かう。一人町外れの丘に上り、動揺を抑えようとしているといつの間にか銀河の列車の旅に出ている。

この旅ではコンパートメントの向いの席にいつのまにかカムパネルラが座っていて、きらめく銀河の世界を共に愉快地旅する。途中で風変わりな大人たちが次々現れ、不思議な光景を見る。後半には同年代の子供たちも乗り込んでくるが、服からは水がしたたり、溺死した人物であることを暗示している。或る点を越えると汽車は戻ることの出来ない坂を

下り始める。ジョバンニはカムパネルラを唯一の仲間と思い、一時孤独感からも解放されていたが、そのカムパネルラが同乗の女の子と話すのを見て嫉妬し不機嫌にもなる。やがて汽車に乗り合わせた人物たちは、「天上へ行くところ」としてのサウザンクロスで降りて行くが、ジョバンニたちはここをも突き抜けさらにどこまでも行こうとする。白く輝く至福の地が暗示されたかに思うと、目前のカムパネルラが消えている。

第三の部分では、カムパネルラが消え、ジョバンニは大声に泣き、ふと気付くと先の丘の上に目覚める。これが夢であったことを知り、家で待つ母を思い出し牛乳屋に向かう。今度は非を認めた牛乳屋からすぐに牛乳を渡される。帰り道に、川で人々が騒いでいるのにぶつかり、川に落ちたザネリを救おうとしてカムパネルラが溺死した現実を知る。カムパネルラの父から、ジョバンニの父が帰ってくることを聞かされ、急いで家に帰るところで物語は終わる。

以上が現在知られている物語であるが、最後がやや唐突な感じは否めない。カムパネルラの死を知ったジョバンニは夢中で走り出すが、何も言葉には出てこない。物語としては重要な場面があまりにあっさりしているような感じすら受ける。カムパネルラの父の方も妙に冷静でいる。懐中時計を見て、発見されなかった子供を諦め、むしろ助けに集まってくれた人々を案じているような具合だ。第一の部分での学校の生活や、続く銀河の世界があれだけ不思議でありながらリアリティをもって語られていただけに、この末尾はリアリズムの見地からは物足りないが、生前未刊の「銀河鉄道の夜」にそのような現実性を求めてはいけないうちかもしれない。

むしろ、三次稿から四次稿へと大きな改変がありながら全体を通しての内的な論理が通っていることに驚くべきかもしれない。この改変を順にみておくと、まず、第一の部分、つまり第1、2、3章にあたる部分は三次稿までには存在していなかった。最初の構想の段階ではこの部分がなく、三次稿でも家庭環境などはジョバンニの独白を通して語られていた。ジョバンニとカムパネルラは友人ではなかった。物語自体は現行形でみる第二の部分、つまりジョバンニが機関車の真似をして坂を駆け降りる「ケンタウル祭」の章から始まっていた。そしてこの章は、と言うことはつまり物語全体はまず、ジョバンニの独白に始まっていた。四次稿ではそれまで多用されていた独白が削られたり、直接話法の言葉に変えられた。また章題も「ケンタウル祭の夜」と「夜」が加えられて、標題の「銀河鉄道の夜」との照応関係が強調されるようになった。

銀河鉄道の旅の部分から末尾（第三の部分）は、三次稿ではかつて良く知られていた「セロのやうな声」、何とも暖かく見守るブルカニロ博士によって導かれていたのだが、四次稿ではこの重要人物が完全に姿を消してしまった。これにより、ブルカニロ博士の思考伝達実験とされていた旅の意味が変わってくるのだが、それでも全体の意味が通っている、と言うよりもむしろ、そのことによって全く別の意味が賦与され、ジョバンニの性格づけも見事に変えられて新しい物語に成長を遂げていると言ってよいだろう。³ それにしても最も大きな変更はこのブルカニロ博士が削られたことと思われるので、まずブルカニロ博士の果たしていた役割とその意味を考えてみよう。

2. ブルカニロ博士

初期形第三次稿のジョバンニは、母のためのミルクが入手出来ず、家に帰るのも嫌になって町外れの丘へ逃れてきていた。そしてこの部分の原稿が失われているためにはっきりしないものの、丘の上でブルカニロ博士に出会い、銀河鉄道の旅に誘い出された筈である。三次稿の「天気輪の柱」の章に「ところがいくら見てゐても、そこは博士の言ったやうな、がらんとした冷たいとこだとは思はれませんでした」(p. 509)とあって、この「博士」がジョバンニに銀河について説明したらしく思われる。この先の列車の旅ではジョバンニが、不思議な光景に疑問を持つと、どこからか「セロのやうなごうごうした声」が聞こえてきて、「(ひかりといふものは、ひとつのエネルギーだよ。[…])」(p. 510)という説明をしてくれる。旅の途中でジョバンニが疑問を持ったり、不安になったりするたびに「あのつかしいセロの、しづかな声」(p. 515)、「いままでたびたび聞えたあのやさしいセロのやうな声」(p. 553)が聞こえてきて、ジョバンニを導いて行く。

そして数々のエピソードの後、タイタニック号で遭難した子供たちも列車を下りてしまった後、カムパネルラと「ほんたうのさいはひは一体何だらう」と話し合い、わからないなりに「どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行かう」(p. 552)と誓い合った直後に、カムパネルラの姿が見えなくなる。「みんな集まってるねえ。あすこがほんたうの天上なんだ。あゝあすこにゐるのぼくのお母さんだよ」という言葉にある、カムパネルラだけに見えるきれいな「野原」へカムパネルラは行ってしまったらしいことが読者には感じられる。しかしジョバンニにはこの場所は「ぼんやり白くけむってゐるばかりどうしてもカムパネルラが云ったやうに思はれませんでした」(p. 552, 293)としか見えず、カムパネルラとの違い、それぞれの人生の違いが示される。ここまでの部分は、四次稿と三次稿の間に違いはない。だがこのクライマックスの場面に、三次稿では「黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の痩せた大人」が登場していた。ブルカニロ博士とは書かれていないが、「いままでたびたび聞えたあのやさしいセロのやうな声」で話しかけてくるので同一視できるだろう。カムパネルラが消えた後の席に「大きな一冊の本」を手に座っている。そしてカムパネルラが「こんや遠くへ行った」こと、「さがしてもむだ」なことを告げる。

「ああ、どうしてなんですか。ぼくはカムパネルラといっしょにまっすぐ行かうと云ったんです。」

「あゝ、さうだ。みんながさう考へる。けれどもいっしょに行けない。そしてみんながカムパネルラだ。おまへがあぶどんなひとでもみんな何べんもおまへといっしょに苹果をたべたり汽車に乗ったりしたのだ。だからやっぱりおまへはさっき考へたやうにあらゆるひとのいちばんの幸福をさがしみんなと一しょに早くそこに行くが、そこでばかりおまへはほんたうにカムパネルラといつまでもいっしょに行けるのだ。」(p. 553)

というやりとりを交わす。この「痩せた大人」は「そこ」へ行くことをジョバンニに諭し、ジョバンニがどうやって求めればよいかを問うと、「おまへはおまへの切符をしっかりとっておいで。そして一しんに勉強しなけいけいけい。」という答えを返す。「あらゆるひとのいちばんの幸福」を探すことに触れているが、特定の友人カムパネルラとだけ共にいることは出来ない。「みんながカムパネルラだ。」どんな人でもカムパネルラになり得

る、あるいはどんな人をもカムパネルラのように思わなければならない、ということになるだろう。「だからやっぱりおまへはさっき考へたやうにあらゆるひとのいちばんの幸福をさがしみんなと一しょに早くそこに行くがい」と勧めているが、「そこに行く」方途としては「あらゆるひとのいちばんの幸福をさがすこと自体が既に方途であることを示している。「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と「農民芸術概論綱要」に要約された思想がそのまま表明されている。⁴ 極めて前向きな姿勢、賢治自身の思想とも全く矛盾しない、感動的な場面である。にもかかわらずこれを四次稿ですっかり削ってしまったのは何故か。ここだけではない。これに続く部分、ジョバンニに向かって自分に出来ることを、自分なりの勉強を成し遂げよと説く場面も四次稿では削られ、カムパネルラの姿が見えなくなった後は、すぐに丘の上で目覚めることになっている。勿論、あまりに説教臭いところがあれば、物語としての面白さのためにそれを削るということはある得るだろう。しかし果たしてそれだけだろうか。むしろ物語の内的論理を全うするための削除だったように思われる。そのことを論ずる前に、同じブルカニロ博士のもう一つの感動的な場面、「地理と歴史の辞典」とブルカニロ博士の言う思考伝達実験の説明を聞いておこう。少し長いが引用する。

「[...] けれどももしおまへがほんたうに勉強して実験でちゃんとほんたうの考とうその考とを分けてしまへばその実験の方法さへきまればもう信仰も化学と同じやうになる。[...] これは地理と歴史の辞典だよ。この本のこの頁はね、紀元前二千二百年の地理と歴史が書いてある。よくごらん紀元前二千二百年のことではないよ、紀元前二千二百年のころにみんなが考へてゐた地理と歴史といふものが書いてある。だからこの頁一つが一冊の地歴の本にあたるんだ。いゝかい、そしてこの中に書いてあることは紀元前二千二百年ころにはたいてい本当だ。さがすと証拠もぞくぞく出てゐる。けれどもそれが少しどうかたと斯う考へだしてごらん。そら、それは次の頁だよ。紀元前一千年、だいぶ、地理も歴史も変ってるだらう。このときには斯うなのだ。変な顔をしてはいけない。ぼくたちはぼくたちのからだだって考だつて天の川だつて汽車だつて歴史だつてたゞさう感じてゐるのなんだから、[...]」
[...] するといきなりジョバンニは自分といふものが自分の考といふものが、汽車やその学者や天の川やみんないっしょにぼかっと光ってしんとなくなつてぼかっともつてまたなくなつてそしてその一つがぼかっともつとあらゆる広い世界ががらんとひらけあらゆる歴史がそなはりすつと消えるともうがらんとしたたゞもうそれっきりになつてしまふのを見ました。(p.554—555)

文体の面からみれば、息の長い、句読点なしに続く文章であるが、この文章のリズム自体が、この灯ったり消えたりする「考(かんが)」と言う不思議な雰囲気を書しだしているのだろうし、「ぼかっともつてまたなくなつて」という光の明滅の映像の面からみれば、これは直ちに「ポラーノの広場」のしろつめくさの灯りをも思い出させる。先に見た、カムパネルラにとっての「ほんたうの天上」、カムパネルラだけにはきれいな「野原」に見え、ジョバンニには「ぼんやり白くけむつてゐるばかり」の場所と言う言い方もやはり、ポラーノの広場そのものを思わせるものがある。「ポラーノの広場」と「農民芸術概論綱要」の関係が深いことから、この「地理と歴史の辞典」の発想自体を賢治が消してしまいたかつたとは考えにくい。⁵

ただ、視点を交えてものを見ること、他者は他者であつて、同じものでも同じに見ることは出来ないかもしれないこと、それにも関わらず他者の視点を自分の中に持つことが出

来るだろうか、という賢治のテーマに戻って「銀河鉄道の夜」をみると、銀河の中のプリオシン海岸の場面にジョバンニの質問に答える「学者らしい人」が出てくる。百二十万年ぐらい前のくرمを見つけたジョバンニとカムパネルラの二人はさらに進んで発掘現場に近づく。ジョバンニの問いに発掘を指導している「大学士」が説明をする。

「標本にするんですか。」

「いや、証明するに要るんだ。ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらゐる前にできたといふ証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがったやつからみてもやっぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空か見えやすいかといふことなのだ。わかったかい。[….]」
(p. 521, 259)

この場面は四次稿でも三次稿とは全く変わらず、やりとりはそのままに保たれている。ここでは先にくرمを見つけたのはカムパネルラなのだが、興味を持って聞いているのはジョバンニの方であるように感じられる。カムパネルラは先を急ぎ、列車に乗り遅れないように「もう時間だよ。行かう」とジョバンニを促す。歴史や、視点の秘密に触れることが出来るのは、或いは触れるべきなのは常にジョバンニである。この短いやりとりだけでは無論ジョバンニは理解せずに立ち去ったようであるが、三次稿ではこれが後のブルカニロ博士の説明への伏線にもなっていたわけであるし、ブルカニロ博士の削除された四次稿に至っては、ジョバンニへの、ひいては読者への謎として残されたと考えられるのではないだろうか。

このように見てくると、先に見たブルカニロ博士＝「黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の瘦せた大人」の説明の哲学的、思想的解釈よりは、この「地歴の本」を示しながらの場面が削られたことと、その結果として、夢から醒めた後でも、ブルカニロ博士が登場しないことの意味を考えることが先であるように思われる。

3. 金貨

初期形第三次稿では「黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の瘦せた大人」が説明を終え、一面の光の中で見えなくなると、「あのセロのやうな声」が「さあ、切符をしっかりと持っておいで。お前はもう夢の鉄道の中でなしに本当の世界の火やはげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない。[….]」(p. 555)と励ます。するとジョバンニはいつのまにか先の丘の上に立っていて、ここにブルカニロ博士が近づいて来る。そしてこれが「私の考を人に伝へる実験」であったこと、それがうまく行って満足していることを伝え、「お前は夢の中で決心したとおりますぐに進んで行くがいゝ」と励ます。ジョバンニも「僕きっとまっすぐに進みます。きっとほんたうの幸福を求めます。」と従順に答えて立ち去ろうとする。この時、博士は「これはさっきの切符です」と言いながら「小さく折った緑いろの紙」をジョバンニのポケットに入れるのだが、もう「そのかたち」は天気輪の向こうに見えなくなる。ジョバンニが丘を走り降りて行くと「ポケットが大へん重くカチカチ鳴るのに気がつきました。」これを調べると「[….]あの緑いろのさっき夢の中で見たあやしい天の切符の中に大きな二枚の金貨が包んでありました。「博士ありがたう、おっかさん。すぐ牛乳をもって行きますよ。」」と物語は締め括られる。ここでは

カムパネルラのことは忘れ去られたかの如く、全く触れられていない。勿論、友人を助けに水に入ったことも全く語られていない。三次稿はあくまでもジョバンニの閉ざされた内面を語り、現実の交遊関係、人間関係は希薄である。また後にも触れるが、カムパネルラとは友人ではなかったこともある。ジョバンニの夢も受動的で、ブルカニロ博士の実験であったわけだが、その褒美として「大きな二枚の金貨」を受け取っている。この箇所は興味深いので、三次稿よりもさらに前の段階、二次稿、一次稿も見ておきたい。

二次稿を読んでもこの部分には変更がなく、三次稿と同じであったことがわかる。しかし一番最初の稿、一次稿まで遡ってみると、ジョバンニが同じうように「僕きっとまっすぐに進みます。きっとほんたうの幸福を求めます」と言って立ち去ろうとする時に博士は無言で「ちょっとジョバンニの胸のあたりにさはったと思ふと」もう「そのかたち」は天気輪の向こうに見えなくなっている。ジョバンニが丘を走り降りて行くと「ポケットが大へん重くカチカチ鳴るのに気がつきました。」これを調べると「それは大きな二枚の金貨でした。「博士ありがたう、おっかさん。すぐ牛乳をもって行きますよ。」と、最後は同様の言葉で物語は終わっている。ここでもカムパネルラのことは語られていない(p. 476)。つまりここの博士は象徴的な意味を持たせようとした「天上でもどこまでも行ける切符」をジョバンニに返すことはなく、従ってその切符が現実的な金貨に変わることもなければ、金貨がそれに包まれていることもない。博士はもっとずっと魔術的な雰囲気感を漂わせていて、無言で「ちょっとジョバンニの胸のあたりにさはった」だけであって、これが報酬だったということになる。ここでも思い起こされるのは、グスコブドリや、ポラーノの広場の物語の改稿の過程であって、いずれも初期には魔術的な雰囲気感を漂わせていた。「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」は化け物の世界の物語であったし、ネネムにとってはある時から自分の意志とは無関係に何事もどんどん実現して行く、他律的な物語であった。⁶

ところが、これが四次稿でどう改変されて行ったかをみると、カムパネルラがいなくなったことに気付いた直後、「ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれておむってゐたのでした。胸は何だかをかしく熱(ほ)り頬にはつめたい涙がながれてゐました」と書かれていて、銀河系の汽車の旅はすべて夢の中の出来事であったことがはっきりと示されている。ブルカニロ博士は出てこない。その後が書き加えられたわけであるが、家でジョバンニを待つ母のことを思い出し、牛乳を取りに牧場へ向かう。「白い太いずぼん」の牧場の人は、配達出来なかったことの非をすぐに認め、ジョバンニに対し三回も謝る。これは最初に受け取りに行った時の女の人の邪険な扱いとは較べものにならない扱いである。そして「ジョバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のてのひらで包むやうにもって牧場の柵を出ました。」さらにこの後に、カムパネルラがザネリを救おうとして溺れたことを知る衝撃的な場面が加えられる。カムパネルラの父は経過時間から冷静に捜索の中止を認め、さらに息子の友人ジョバンニの父が帰ってくることをジョバンニに伝え、「あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね」と言う。ジョバンニは「早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせようと思ふともう一目散に河原を街の方へ走りました。」と結ばれている。

この結末には幾つか注目すべき点がある。まずカムパネルラの父は一貫して「博士」と呼ばれていることである。四次稿の冒頭では、ジョバンニがカムパネルラの家遊びに行った時に、カムパネルラの「お父さんの書斎から大きな本をもってきて、ぎんがといふところをひろげ、まっ黒な頁いっぱい白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした」(p. 235—236)という出来事が印象的に語られていた。精巧な「アルコールラムプで走る汽車」(p. 241)の玩具を子供に与えていた学者であり、ジョバンニの母によれば「うちのお父さんとはちょうどおまへたちのやうに小さいときからのお友達だったさうだよ」(p. 241)と言われている。削られたブルカニロ博士が、学校の先生と、このカムパネルラの父とに分かれて存続しているかのようである。

そしてこのカムパネルラの父は、最後の場面では「また川下の銀河のいっばいにうつった方へじっと眼を送りました」(p. 298)と書かれている。ケンタウル祭の夜、ジョバンニが銀河鉄道の旅に出る前に見た光景、丘から見下ろす町の灯、黒い川に浮かぶ烏瓜の灯り、「黒くひろがった野原」(p. 248)を行く夜行列車、そして大空に浮かぶ無数の星が川の反映となって対応していた映像がここにも蘇っている。カムパネルラの父は川下に溺れた息子の姿を求めているというよりは、あたかもそこに反映した銀河の中にこそカムパネルラがいることを、ジョバンニ同様に知っているかのようでもある。この場面を賢治は注意深く用意したと思われ、少し前にも「下流の方は川はゞいっばい銀河が巨しく写ってまるで水のないそのまゝのそらのやうに見えました」(p. 297)と書いている。

このような映像の統一性を保証し、象徴としての役割を果たすもう一つのものが「牛乳」であった。三次稿までは「琴の星がずうっと西の方へ移ってそしてまた草(きぬ)のやうに足をのばしてゐました。」(p. 556, 501, 476)と締め括られていた物語が、牛乳を持ち帰る結末に改められた。また四次稿冒頭の学校の授業の中でも先生は銀河が「乳の流れたあと」(p. 234)と言われていることを紹介し、「巨きな乳の流れと考へるならもっと天の川とよく似てゐます。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでゐる脂油の球にもあたるのです」(p. 236)と銀河系を科学的に説明していた。物語の最初からずっと用いられてきた牛乳のイメージがさらに一貫性を与えられたことになる。しかも、このジョバンニが持ち帰る牛乳は「まだ熱い乳の瓶」と書かれていた。病気の母にはおそらく何よりの新鮮な牛乳。これを三次稿に書かれ後に削られた部分と対比してみると興味深い。

(今日、銀貨が一枚さへあったら、どこからでもコンデンスミルクを買って帰るんだけれど。ああ、ぼくはどんなにお金がほしいだらう。[…]) (p. 506)

これは三次稿冒頭「ケンタウル祭」の章の、配達できなかった牛乳を「牛乳屋」に取りに行つて断られた部分の直後に来るジョバンニの独白である。ここではジョバンニの希望は金銭に絞られていて、後に銀河鉄道の中で「ほんたうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまはない」(p. 551)とカムパネルラと共に感極まって叫ぶジョバンニはここからは想像すべくもない。そして病気の母のためにジョバンニが夢想していたのは「コンデンスミルク」であったが、先に見たやうに四次稿では「まだ熱い乳の瓶」を手に入れて帰ることになる。この違いは決定的に大きい。⁷

4. 「ケンタウル祭」から 「ケンタウル祭の夜」へ

こうした観点を踏まえて三次稿「ケンタウル祭」から四次稿「ケンタウル祭の夜」への改変を細かく読んでみると、これは物語の性格を完全に交えてしまうほどの根底的な改変であったことがわかる。特にこの章は賢治一流の改訂が見事に集中的に行われているように思われるので、賢治の文体の特徴とも併せてもう少し詳しく見てみよう。

三次稿ではこの冒頭の「ケンタウル祭」の章でジョバンニの学校や家庭における境遇はすべて説明されていた。説明と言ってもジョバンニの独白が括弧（ ）の中に括られてかなり長く展開されていた。冒頭二行もいきなりこの内心の言葉で始まる。子供の心の中を何とも直接に感じさせる見事な書き出しなのだが、語り手が坂を駆け下りてくるジョバンニを提示し、次の独白になる。ここでは四次稿にみられる独白と並べて示してみよう。

（ぼくはまるで軽便鉄道の機関車だ。ここは勾配だからこんなに速い。 […]）
[三次稿 p.502]

（ぼくは立派な機関車だ。ここは勾配だから速いぞ。 […]）
[四次稿 p.242]

三次稿では「まるで」という言葉を挟むことによって、これが本当の機関車ではなく、子供が機関車のふりをしていることを示している。示しているのは作者賢治である。テキストとしては（ ）に入れられジョバンニの独白ということが示されているが、実際に走って遊んでいる子供の言葉としては不自然である。しかも登場人物の名前にイタリア人であるかのような名前を用い、どこの物語と特定しない不思議な雰囲気醸し出しつつも、賢治の花巻に極めて密着した「軽便鉄道」が出てきて、説明的な要素が強い。本来ならば物語を進行させる語り手が説明すべき部分を台詞の中に組み込んでしまったとみてよいだろう。これが四次稿になると「しゅっしゅっ」という擬音も省かれ、もっと直截的な、力強い断定に変わっている。子供が自信、誇りを持っていることまでが感じられる。

次いで坂を下る途中でジョバンニは級友のザネリと行き合う。ジョバンニが話し掛けようとするが言い終わらないうちからザネリは「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着が来るよ」（p. 503, 243）と悪態をつく。この悪態自体は三次稿でも四次稿でも変わらないが、これに対するジョバンニの反応はどうだっただろうか。三次稿ではジョバンニは何も言い返すことが出来ない。（ ）の中に示され、心の中で呟くだけである。

（ザネリは、どうしてぼくがなんにもしないのに、あんなことを云ふのだらう。
[…] それにザネリやなんかあんまりだ。けれどもあんなことをいふのはばかだからだ。）（p.503-504）

このように内気なジョバンニも、四次稿になると、

「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返し […]（p. 243）

と改められる。今度はジョバンニの言葉は「 」で示され、直接ザネリに向かって言葉を投げつけている。直後の、もうザネリの姿が見えなくなってしまった時のジョバンニの言葉も「 」で示され、ここは独白なのであろうが、やはりザネリに対して言葉を投げつけるような強さを読者に感じさせる。

「ザネリはどうしてぼくがなんもしないのにあんなことを云ふのだらう。走る
ときはまるで鼠のやうなくせに。ぼくがなんもしないのにあんなことを云ふの
はザネリがばかなからだ。」(p. 243)

確かにこれは内気に心の中で呟くと言うものではなく、「ぼくがなんもしないのにあんなことを云ふのは」の繰り返しにも現れているように、感情の昂りのままに直接ザネリに向かって吐き出した言葉であると感じられる。読点も省かれ、一息に言っている。また三次稿で「ばかだからだ」とあったものを四次稿においてわざわざ「ばかなからだ」としたのも、瞬間的な子供の言葉づかいをより忠実に再現していると言えないだろうか。ここでのジョバンニは最早臆病ではなく、陰に籠もっているわけでもない。非が自分にあるのではなく、級友の態度をきちんと見て評価を下し、それを相手の面前で断固として言っている。筋の通った、潔癖な、極めてはっきりした性格がここからは読み取れる。

またこの箇所に限らず全般にわたって言えることではあるが、三次稿までの客観的、描写的な調子が、四次稿になってジョバンニからの視点に変更されているところが多い。特に、ジョバンニを挑発するザネリの描写にしても、「ひらっとジョバンニとすれちが」うのが四次稿では「ひるまのザネリ」(p. 243)であるのに対し、三次稿では「一人の顔の赤い、新しいえりの尖ったシャツを着た小さな子」(p. 503)という調子である。四次稿ではジョバンニの視点に引きつけて、昼間の学校での悔しさを忘れずに物語に導き入れているのに対し、三次稿はあまりにも客観的で物語の進行の速度にも影響を及ぼしそうである。

他にも賢治の文体の特徴としては印象的なオノマトペが挙げられる。「ひらっとすれちが」うを始め、ザネリの悪態を耳にした時には「ぱっと胸が冷たくなり、そこら中きいんと鳴るやうに思いました」(p. 243, 503)とある。次の章で丘の上まで上り、頂きの天気輪の柱の下に来ると、からだは「どかどか」している。これに加えて、人称の自由な移動と言うか、視点の移動も挙げることが出来る。物語が一人称と三人称と混ぜて語られるばかりでなく、三人称で語られているかのようでありながらいつの間にか一人称の視点から語っているという文体は、日本語の現実嵌入性という特徴でもあろうが、賢治はこれを活かして子供の世界と大人の世界が渾然としてくるような独特の世界を作り出している。⁸

ケンタウル祭の飾りつけが施された街の時計屋のショウウィンドウに飾られたものもヨーロッパを思わせるものであるが、この描写にも若干の書き直しがある。初期形第三次稿にあった「眩しいプラチナや黄金の鎖だの」「指輪だの」(p. 504)といった具体的な物は削られ、四次稿では豪華できらびやかではあっても子供の想像力を反映したものになっている。三次稿ではこのウィンドウの前で現在の境遇を嘆くジョバンニの独白があり、母の具体的な病状、母への同情の独白もあったがこれも削られた。物語の背景の情報として必要な部分は四次稿では帰宅したジョバンニと母が直接話す場面となって前の章に加えられ、この時計屋の星座の図の前のジョバンニは心置きなく、灯一宝石一星と純粹に想像力を繰り広げている。そして四次稿で付加された数行の星座早見盤の描写「そのまん中には上から下へかけて銀河がぼうとけむったやうな帯になってその下の方ではかすかに爆発して湯気でもあげてゐるやうに見えるのでした」(p. 244)によってもこの映像の統一性は強められ、同時に無理なく牛乳に戻ることが出来るようになった。物語末尾の星から牛乳へと戻

る動きを先取りするかのような、地上の世界と星の世界の照応が始めから準備されるという方向にテキストの改訂が行われていったことがわかる。

こうしてジョバンニはショウウィンドウの前での夢から醒めて町はずれの牛乳屋に向かうことになる。この場面の手入れは一見些細なように見えるが、わずかの語だけでやはりひどく正確にジョバンニの性格、立場を変化させているもう一つの例となるだろう。

初期形第三次稿ではジョバンニは「年老った下女」に今日牛乳が届かなかったことを「一生けん命勢いよく」言うが即座に断られる。「ちゝ、今日はもうありませんよ。あしたにして下さい。」再度頼むが（「おっかさんが病気なんですがないんでせうか。」 p. 506）、気弱なジョバンニは無理強いが出来ない。また「年老った下女」の方も素っ気ない。結局ジョバンニは相手にされず、邪険に追い払われる印象である。

これが四次稿では「年老った女の人」が「どこか工合が悪いやうにそろそろと出て来て」ジョバンニに應對する。「いま誰もゐないでわかりません。あしたにして下さい。」この後、ジョバンニが普段とは違い母が病気で切迫した必要があることを訴える（「おっかさんが病気なんですから今晚でないと困るんです。」 p. 245）と、「ではもう少したつてから来てください」との答えが返ってくる。ここでのジョバンニはどうしても牛乳を手に入れたいという気持ちがはっきりしていて物怖じせず、引くことなく要求をする。それが三次稿の時とは違う回答を引き出すことにつながっている。

三次稿の「下女はもう行ってしまひさうでした」は「その人はもう行ってしまひさうでした」へと書き換えられた。「もう行ってしまひさうでした」という事実（状況）は同じでも、老女の呼び方が「下女」から「その人」に改められたことで読者が受ける印象の上では大きな違いが生じる。わずかな違いとは言え「下女」が子供の視点ではなく物語の語り手が話を進めるために客観的に環境を捉えて無感動に語っているように聞こえるのに対し、「その人」としたことによって、ここにジョバンニの目から見た大人としての姿が反映してくる。牧場での役割、地位、男女の別も今のところジョバンニにとっては問題ではない。應對に出たのが誰であろうとも、ジョバンニにとってはともかく牛乳を手に入れられさえすればよい、という切迫した感覚までが響いてくる。四次稿での女の方はジョバンニの言葉にきちんと耳を傾け事情を理解し、ただ自分にはどうにも出来ないことを言って、再度来るように言う。全くのはなからの拒絶とは大きな違いである。

従って続く章でジョバンニが黒い丘を上って行ったのも、四次稿では少し時間をおいてから再度牛乳屋を訪ねるためであり、その時を待つためであった。一方、初期形第三次稿の方では、牛乳を手に入れることが出来ず、お手上げで母の待つ家に帰れないということが、町外れまで行ってそのまま丘を上って行く動機となっていた。このような変更があるので、賢治のテキストはどんな稿も見逃すことができないという気になってくる。しかし丘に上る前にもう少しこの章を見ておきたい。

5. 失われたコンデンスミルク —ジョバンニの独白

初期形第三次稿において牛乳屋で拒絶され「泪がいっぱい湧いた」ジョバンニは外へ

出る。この時、少年はこんなことを考える。

([…] けれども、あゝ、おっかさんは、いまうちでぼくを待ってる。ぼくは早く帰って、牛乳はないけれども、おっかさんの額にキスをして、あの時計屋のふくろふの飾りのことをお話しよう。) (p.506)

これは独白のはずなのだが、わざわざ「牛乳はないけれども」と口に出し、大いに気にしつつ自らを励ましている。行き遭った同級生たちからもからかわれ、「何とも云へずさびしくなって」いきなり走りだし、つい今しがた早く帰ろうと考えたところなのに「あの檜の中のおっかさんの家へは帰らないで」、町外れへ向かう。ここには町とその向こうの黒い丘との境界になる橋があり、立ち止まったジョバンニは泣きたいのをこらえて呟く。

(ぼくはどこへもあそびに行くところがない。ぼくはみんなから、まるで狐のやうに見えるんだ。) (p. 507)

四次稿では牛乳屋から出てくる時に涙を浮かべてもいないし、独白もない。この橋の場面も全く削られ、「片足でぴょんぴょん跳んでゐた小さな子供ら」が、わあいと叫んだ後はすぐに、「まもなくジョバンニは黒い丘の方へ急ぎました。」(p. 246)とこの章は結ばれる。ここにも既にジョバンニの性格の変化を見ることが出来る。「泣き出したいのをごまかして」(p.507-508) 孤独を噛み締め、自分が「狐のやうに見える」と卑下する三次稿の場面は省かれ、これは四次稿に至っては先にも引用したように、もっと前の坂を下りてくる場面でザネリとすれちがった時にぶつけ返す蔑みの言葉「走るときはまるで鼠のやうなくせに。ぼくがなんもしないのにあんなことを云ふのはザネリがばかなからだ」に転用されている。そして級友や母のいる現実世界の町と、これからの銀河鉄道の旅の始まる丘との間の境界を示す「細い鉄の欄干のついた橋」もなくなってしまふ。

もっとも、この「橋」の方は注意深く読むと四次稿では別の形で活かされている。牛乳屋を出て「向ふの橋へ行く方の雑貨店の前で」(p.245) カムパネルラたちに行き遭い、からかわれた後、やりすごしてから振り返ると、カムパネルラもまた「向ふにぼんやり見える橋の方へ」(p.246) 高く口笛を吹きながら歩いて行ってしまふ。カムパネルラの歩き去る方向が「橋」の方であったことは初期形第三次稿には書かれていなかった。この夜はからす瓜を川に浮かべる祭りだが、その後ザネリが溺れ、カムパネルラが助けようと試みる話を、読者に対し既にここで密かに暗示している。と言って言い過ぎであれば、ジョバンニと橋を結びつけるのではなく、カムパネルラと橋を結びつけた印象を準備している、と言った方がよいかもしれない。これによってジョバンニが「境界」を越えることがなくなる。四次稿での銀河鉄道の旅は全くの異界へブルカニロ博士によって連れ出されるというものではなくなっていた。町外れの「橋」が「現世」と「あの世」とを分かつ境界という象徴性を持つ差し迫った必要もない。ジョバンニの「旅」はジョバンニ自身の想像力によって繰り広げられる。これに対しカムパネルラはこの「旅」から帰ってくることはない。ジョバンニとカムパネルラの関係についての情報という意味でも重要なこの独白をもう少し引用しよう。

(今日、銀貨が一枚さへあったら、どこからでもコンデンスミルクを買って帰るんだけど。ああ、ぼくはどんなにお金がほしいだらう。青い苹果だってもうで

きてるんだ。カムパネルラなんか、ほんたうにいいなあ。今日だって、銀貨を二枚も、運動場で弾いたりしてゐた。

ぼくはどうして、カムパネルラのやうに生まれなかったらう。カムパネルラなら、ステッドラーの色鉛筆でも何でも買へる。それにほんたうにカムパネルラはえらい。〔…〕 (p. 506)

先にも見たが四次稿においてブルカニロ博士が完全に姿を消してしまったことに伴い、この作品の中での貨幣の扱いは全く変わってしまった。初期稿では、母の闘病の困難を助け得る手段は金銭であった。「どこからでも〔…〕買って帰る」とあるように、いつもの牛乳屋からの配達がなければ代替物があると言わなければならない。そして新鮮な牛乳ではなく工業製品としての「コンデンスミルク」が考えられている。この物語の町はそれほど大きな都会とは思えないが、貨幣経済、市場経済が機能しているかの如くであり、少年は何のわだかまりも見せず、金銭による問題の解決を夢見ている。

同様のことはジョバンニの憧れのライバル、カムパネルラへの気持ちの表明についても言うことが出来る。「銀貨を二枚も、運動場で弾いたりしてゐた」カムパネルラは「ステッドラーの色鉛筆でも何でも買へる」から「えらい」と、ジョバンニの眼には映っているかの如くである。⁹ カムパネルラが学校で成績の良いことと、経済的に余裕のあることが殆ど同一視されている。そしてジョバンニは自分の環境を振り返り、卑下し、悔やむ。初期形におけるジョバンニはここだけで見ても何とも他者依存的だったのである。

また初期形では、銀河鉄道に乗り込む前、学校や放課後の生活でジョバンニとカムパネルラが仲良く遊び、話す場面はなかった。そればかりかこのモノローグの少し先には、

(ぼくがカムパネルラと友だちだったら、どんなにいゝだらう。〔…〕) (p.506) という痛切な言葉があった。放課後カムパネルラの家でランプで走る汽車のおもちゃで遊んだり、百科事典で星の頁を眺めたりという場面が加えられたのは四次稿になってからである。また、その親しいカムパネルラまでが祭りの日には級友たちと共に、カムパネルラを除け者にする側にまわり、しかしその中で一人躊躇いを見せる、という微妙な少年の心理を描く新たな場面が作られた。ジョバンニもそれを理解していて、この場面は二人の間の越えられない違いを示す一つの印象的な場面となった。

6. 黒い丘の上のジョバンニの視線

こうしてジョバンニは続く章で天気輪の柱のある丘に、三次稿と四次稿とでは異なる動機によって上ることになるのだが、初期形第三次稿から四次稿への大きな改変は、丘の上でのジョバンニの視線にもはっきりと現れている。丘の上に辿り着き、天気輪の柱の下に身を投げ出すと、三次稿では「ジョバンニはじっと天の川を見ながら考えました。」(p.508)とあり、その後に独白が続く。ジョバンニはまず上空を、満天の星を見上げ、「ここではない場所」へ行きたい、逃れたいと思いを馳せる。

(ぼくはもう、遠くへ行ってしまうみたい。みんなからはなれて、どこまでもどこまでも行ってしまひたい。〔…〕 ぼくはもう、空の遠くの遠くの方へ、たった一人で飛んで行ってしまひたい。) (p. 509)

やがてこの孤独な夢想を断ち切るかのように、野原からは汽車の音が聞こえてくる。これ

によってジョバンニの関心は汽車に移り、その中で苹果を食べる人の姿を思い浮かべる。

しかし四次稿ではこの独白は削られる。天気輪の柱の下に身を投げ出すと、ジョバンニはまず「町のはづれから遠く黒くひろがった野原」(p. 248)を見渡す。すると汽車の音が聞こえてくるのである。ジョバンニの視線は地上へ向かう。満天の星よりは、まず真っ暗な野原の中の鮮烈な一筋の光、夜行列車の方に焦点が定まって行く。ジョバンニが星空に思いを馳せるのはその後である。このように見てくると、

「あゝあの白いそらの帯が牛乳の川だ〔以下原稿五枚なし〕」〔三次稿, p.509〕

「あゝあの白いそらの帯がみんな星だといふぞ。」〔四次稿, p.248〕

の違いもはっきりと意識されることになる。三次稿においては、星空を見上げていながら考えるのは牛乳(天の川=ミルクウェイ)のことばかりである。地上世界では母のために真先に必要でありながら、なかなか手にすることが出来ない「牛乳」。これが空を見上げれば豊かに川となって溢れるほどある。これに対し四次稿の方では、ジョバンニは昼間学校で先生から説明されたこと、かつてカムパネルラの家で百科事典で調べたことを思い出し確認しているだけであるとも言えよう。

四次稿には既にカムパネルラの家の精巧な玩具の汽車が出てきていた。ここでのジョバンニは少し後には牛乳も入手出来そうであり、今はそれを待っているところであって、合わす顔がないと意図的に家や母を避けているわけではない。無論、級友から除け者にされる孤独感はそのまま残っているが、丘の上でのジョバンニの視線は地上に向かう。この視線は逃避というよりは、現実世界での可能性、現実世界への希望に向かっていくように感じられる。場面がこのように改変されたからこそ、四次稿で読んだ方が銀河鉄道の旅の唐突さが減ずるように感じられてくるし、車中にカムパネルラがいることにジョバンニ自身が驚くことの意味も変わってくる。初期形第三次稿では、一緒にいるはずのない憧れの人が目の前にいるという戸惑いがまず来ていた。しかし四次稿では、一緒に「アルコールランプの汽車」で遊んだ仲である。なぜこの同じ時に乗り合わせたのかという感覚ばかりが先に来て、共にいること自体は何の不思議もないのだ。またこの先、乗り込んでいた一人が差し出してくれる苹果、皮を剥くと不思議に蒸発してしまうあの匂いのいい苹果も、単なる不思議ではなく、丘の上のジョバンニと列車の中のジョバンニを結ぶもう一つの要素として、イメージの厚みを増してくる。一つのイメージが他の箇所の、恐らくは無意識の改変によってさらに輝きを増してくること、一つのイメージが象徴としての確かさを持つようになる過程をここに見ることが出来る。これもまたテキストの不思議な力の一つと言ってもいいかも知れない。

四次稿では地上の眺めからも象徴が作り出されて行き銀河鉄道の旅につながって行ったが、三次稿では、天の星を見つめ、そこに思いを馳せることでおそらくはブルカニロ博士を呼び出し、導かれて銀河鉄道の旅の夢に入って行ったのだろう。「そこは博士の云ったやうな、がらんとした冷いとこだとは思はれませんでした」(p.509)と言う三次稿の箇所は、四次稿では「そのそらはひる先生の云ったやうな、がらんとした冷いとこだとは思はれませんでした」(p.248)と書き直されているところからみても、ブルカニロ博士が削除

された後も銀河系の科学的な説明の側面は、学校の先生に託されて残っている。この点からみてもブルカニロ博士が削られたのは、物語として少年の自律を促すためであったと考えられる。つまり、ジョバンニを導くという役割、また列車の中で子供に教訓を述べ、導く姿勢だけが三次稿から削除された。賢治は自らの進む道は、この物語の読者である少年自身に気付かせるような構成にしようとしたのだと言うことができるだろう。

7. 結論

初期形第三次稿ではブルカニロ博士は「おまへはおまへの切符をしっかりとっておいで。そして一しんに勉強しなけいけいけい」(p.554)と汽車の中でジョバンニに説教をした。ややもすれば、アメモマケズ的な自己犠牲の精神だけで語られ勝ちな賢治であるが、「銀河鉄道の夜」の物語はみんなの幸福のために努力しなければいけないという教訓ばかりではない。ジョバンニの旅を暖かく見守り、導く「セロのやうな声」、ブルカニロ博士は最後には削られて行く。ジョバンニの孤独は変わらないが、その性格も内気な消極的なものから、自分に自信を持ち、周囲にぶつかって行くようになって行く。

考えてみれば、各人の越えられない違いを知ること、それを受け入れることを知ることこそが「銀河鉄道の夜」のテーマであっただろう。どんなに憧れ、どんなに一緒に行きたいと思ってもそれは決して叶わない。それぞれの出来ることをする以外に方法はない。これは賢治の他の物語にもみられることである。風の又三郎もそうだったし、ネネムもばけもの世界に入ってしまった以上、人間の世界に「出現」するわけには行かない。ブドリとペンネン技師もそれぞれの道に行く以外にない。レオーノ・キューストはジョバンニよりも大人で経験を積んでいるだけに、そのことを良く知っていて、ファゼーロとは決して同じ世界にいない。しかし「銀河鉄道の夜」はこのことを一番鮮やかに示したし、賢治はこれを説教のような形で一方的に教えるのではなく、象徴を通して子供が、あるいは旅する人が自ら考え、体得するように持って行こうとした。

おそらくそのために、初期形に多かった独白は削られ、作品に散見された外来語も削られた。「ステッドラーの色鉛筆」や「コンデンスミルク」のように奇妙にモダンな、ハイカラな言葉が使われていたし、「おっかさんの額にキスをして」というような不思議な言葉もあった。「おっかさん」という日本語と「額にキス」といういかにも西洋の翻訳童話をそのまま取り入れたかのような西洋の風習の不思議な取り合わせが見られた。登場人物の名前からしてもイタリアあたりを思わせる物語であって、その意味ではこうした言葉も決して相応しくないこともないのだが、やはりこれらの言葉はすべて四次稿では削られてゆく。これと呼応するかのようには南欧風の町の飾りつけの描写からも具体的な言葉が削られ、独白は、内心を直接語る部分も説明的な部分も、殆ど全て削除されて行く。一方で「苹果」や、「牛乳」という一つのイメージが、他の箇所から三次稿から四次稿への恐らくは無意識の改変によってさらに輝きを増してくる。この、イメージが厚みを増してくること、一つのイメージが象徴性を高める過程—これを「テキストの力」と呼んで差し支えないだろうと思うが—と、変遷し続ける賢治のテキストの魅力をここに辿ってきた。そしてこのような表現の上の変化こそがジョバンニの内面を語り尽くし、「銀河鉄道の夜」が他

参考文献

- 『宮沢賢治全集 7』ちくま文庫，1985。〔一次稿～四次稿を収録〕
 『新編 銀河鉄道の夜』新潮文庫，1989。
 『新編 ボラ一の広場』新潮文庫，1995。〔「銀河鉄道の夜」三次稿を収録〕

- 『校本 宮澤賢治全集』，第9、10巻，筑摩書房，1974。
 （『新校 宮澤賢治全集』，全16+1巻，筑摩書房，1995～刊行中）
 『新修 宮澤賢治全集』，第12巻，筑摩書房，1979。

- 天澤退二郎『宮澤賢治の彼方へ』思潮社 1968；1987。ちくま学芸文庫，1993。
 天澤退二郎『『宮澤賢治』』，筑摩書房，1976。
 天澤退二郎『『宮澤賢治』』，筑摩書房，1986。
 天澤退二郎『『宮澤賢治』』，『國文學』1975年4月号。
 入沢康夫・天澤退二郎『『宮澤賢治』の議論』，『國文學』1979年4月号。所収。
 中山真彦『『宮澤賢治』の議論』，『銀河鉄道の夜』とは何か』青土社，1976；1979。
 別役実学『『宮澤賢治』の議論』，『銀河鉄道の夜』とは何か』青土社，1976；1979。
 村瀬学『『宮澤賢治』の議論』，『銀河鉄道の夜』とは何か』青土社，1976；1979。
 『別冊太陽 No.50 宮沢賢治 銀河鉄道の夜』，平凡社，1985。

- Train de nuit dans la Voie lactée*, trad. par Hélène Morita, Intertextes éditeur, Paris, 1989. [→ en format de poche, Le Serpent à plumes, Paris, 1995]
Le Train de la Voie lactée, trad. par Françoise Lecœur, Criterion, Paris, 1990.
Night Train to the Stars and other sotories, tr. by John Bester, Kodansha International, 1987. [『銀河鉄道の夜ほか 宮沢賢治童話集2』]
Night of the Milky Railway, translation and guide by Sarah M. Strong, M.E. Sharpe, New York, 1991.